慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安藤昌益の身元と遺稿につきて : 彼は江戸生れであつた 昌益の末孫はどこにいる?
Sub Title	On the discovery of Ando Shoeki's native place and relatives
Author	渡邊, 大濤
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.3 (1956. 3) ,p.203(35)- 213(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19560301-0035
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560301-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

neurial History," Vol. III. no. 2.
[2] A. Grosse and J. S. Duesenberry, "Technological Change and Dynamic Models," prepared for the Input-Output Meeting of Conference on Research in Income and Wealth, October 1952.

兩論文ともここに記述した以上の廣汎な內容と興味ある示唆を含んでいるもので、ここには投資行爲の觀點からその一部分に焦點をおいたものである。論文閲讀の機會は福岡助教授の好意によるものであつた。

〔特別寄稿〕

安藤昌益の身元と遺稿につきて

彼は江戸生れであつた　昌益の末孫はどこにいる？

渡邊大濤

一、緒言

日本が世界に誇り得る唯一の獨創的大思想家と狩野亨吉博士が絶讃された安藤昌益につきては、彼の遺稿百卷九十二册の大著『自然眞營道』が狩野博士によつて發見されて以來、あらゆる方面、あらゆる方法で研究されたが、その身元も生い立ちもさつぱり分らなかつた。ところが『自然眞營道』の發見から五十七年目に、昌益は江戸櫻田で生れたことから、父や祖父の名まで判つて來た。彼の末孫の出現するのも、そう遠い未來ではなかろう。この一文は狩野博士が昌益につきて如何に苦心研究されたかの一端を語り、また他の篤學者たちが殆んど總立ちの努力研究の經過等を略敍して、さらに世の有志家たちが昌益の末孫探し遺稿探しに志される方々の參考に供するためにつづるのである。

二、安藤昌益とはどんな人物か

まだ昌益を御承知ない方々のために、かいつまんで申上げると、

安藤昌益の身元と遺稿につきて

彼は今から二百五十餘年前の德川中期、すなわち享保から寶曆年代にかけて生活していた人物であるが、當時の敎學たる儒敎、佛敎、神道、切支丹（キリスト敎）等を徹底的に批判して、これらをすべて不耕貪食者のもてあそぶ愚民政策の補助具に過ぎないと見たのである。そして神君德川家康を不耕貪食の大ボスであり搾取の主體と見て「奴輩」とののしつた。このころは外國でも農奴を當然の存在と考えていたのに、昌益は生命の糧をつくる農業の甚だ重んずべきこと、從つて農民自身の自重すべきことを力說し、農を本とする民主主義を唱えたのである。なおその上に、物事を相對的に見るべきことを提唱し、絕對的存在物をゆるさなかつた點は、アインスタイン博士の相對性理論を思い合させるものがある。性關係につきては一夫一婦の和合を理想とし、一夫數婦は畜馬の業なりと評した。彼の思想には今の社會主義、共產主義的分子を多量に含んでいるが、その主張と實行方法には大差がある。昌益はあくまで平和論者で、「わが道は兵を語らず、われ爭わず」といい、暴力沙汰や冷戰的手段を排斥した。話せばわかる主義でじゆんじゆんとして非戰論を說

き、禁酒禁煙の健全生活を勸めた。しかも一面には精神的ゆとりを豐かに持ち、鳥獸蟲魚を登場させて人間生活の矛盾を語らせ、人をして思わず吹き出させるという風であつた。

かれはまた數學の重要性を認め、當時の人たちが數學を以て商家の子弟などがもてあそぶ卑しき學問と心得ている愚を笑い、彼の唱道する自然眞營道、すなわち自然の理法に順應して眞實の生活を營む道を實行するには自然を理解しなければならず、自然理解の窮極は數理に歸着すると子弟に敎えている。これほどのずばぬけた大思想家は享保・寶曆當時の世界のどこにも存在しなかつたと狩野博士は主張されたのである。ところでこれほどの大思想家が德川時代から明治へかけて、その名さえ知るものが無かつたとは、どうしたことかとの疑問がおこる。

三、學者總立ちの身元研究

狩野博士が『自然眞營道』百卷九十二册の稿本を買取られたのは明治三十二年（一八九九）であるが、同博士のところへこれを持込んだ本屋は本郷追分の元一高、今の農大の近くに店を持つていた田中清造氏であつた。この人は何にでも「お」をつけるクセがあつて、「さようでございます」を「おさようでございます」ともみ手であいさつするので、「おさよう」のあだ名で通つていた。この「おさよう」本屋が持込んだ『自然眞營道』の內容を讀まれた狩野博士は、その立論のあまりにも破天荒であるのに驚かれると同時にその著者名が、それまでに見たことも聞いたこともないのに驚かれた。この書の大序の卷に確龍堂良中見（著のあて字）とあり、第廿五卷眞道哲論の卷に、「良中先生は藤原氏兒屋根百四十三代之統胤也、倭國羽州秋田城都の住也」とある外に手がかりがない。狩野博士のもとに集まるあらゆる學者たちに尋ねてみても知るものがない。しかし科學鑑定家を以て自任しておられた狩野博士が云われるには、神武天皇以前のことでさえ大體の見當がつく今日、研究して見たら判らないことはあるまいと、九十二册の表紙うらに張つてある紙を一々水につけて丹念にはがして調べられたところが、いろいろの手紙の斷片らしいものが次々とあらわれた。第三十六卷の表紙うらから

安藤昌益樣　　藥種屋大塚屋鐵次郎

と書いた紙片が出てきた。さらに同卷の裏表紙から現われてきた半紙は年賀の包みに使用したもので、金貳百疋を贈ることをいい、弟子たちの名を左の如く列記してある。

關　　立竹
上田祐專
福田六郎
中居伊勢守
高橋大和守
神山仙庵
島守伊兵衞
北田忠之丞
澤本德兵衞
中村忠平
中村右助

正月五日　安藤昌益樣

あとは破れて讀めない。さらに第三十七卷のうら表紙から出てきた紙片には

昌益先生樣　　神山仙確九拜

とあつた。この外多數の興味あるもの、たとえばお餘という嫁らしいものの着る反物のことを書いたもの、資金の調達を賴んだのに對する返辭らしいものなどあつた。

四、確龍堂良中と安藤昌益

以上發見された紙片で『自然眞營道』の著者名確龍堂良中はどうも先生格の安藤昌益と同一人らしいということになつた。藤原と安藤とは同一系統の姓で、これは安倍仲麿七代の後裔朝任のとき藤原姓を賜わつたので、安倍の安と藤原の藤とを合せて安藤と號したとなつているから藤原卽ち安藤と決めても良中と昌益とが同一人であると確定し得る證據の出て來たのはズッと後になる。

大正六年（一九一七）に文部省で全國中學校長會議を開催したとき、東京帝大文科で右の校長たちを招待した。狩野亨吉博士も招かれて出席されたが、その席上で笹作元八博士から『自然眞營道』につきて質問されたので、狩野博士が簡單に說明された。列みいる多勢の校長たちも耳をそばだてて聞いたが、安藤昌益や確龍堂良中の名を知るものはなかつた。井上哲次郎博士は、とにかくすばらしい話だから、その本を大學へ借りて謄寫しようと發言されたが、寫本料の豫算がないというので沙汰やみとなつた。それから六年後の大正十二年の春、吉野作造博士の斡旋で狩野博士から大學へ讓りうけて東大圖書館の所藏となつた。そこでこの貴重書をどう取扱うべきか協議が決まらないので館長室のテーブルの上に飾つておくと、あの九月一日の關東大震災で燒けてしまつた。東大圖書館の藏書七十萬卷を全部失つたよりも『自然眞營道』一部を失つたのが惜しいと內田盧庵氏が『改造』誌上で述懷された。

その後間もなく福岡高校敎授淺井虎夫氏から、寶曆四年に發行された『新增書籍目錄』の中に

孔子一世辨記　二册　安藤良中
自然眞營道　三册　同

の記載あることを狩野博士に報らせてきた。この著書名と著者の名とによつて、確龍堂良中と安藤昌益と同一人であるという證據がありたのである。

五、昌益の他の著書

毎年夏休みになると昌益の著書を探し出すために各縣の書店を次から次とあさり歩くという篤學者もあつたが何等得るところが無いと歎かれたものである。ところがその後の發見物はやはり昔の江戸の地、卽ち今の東京であつた。この理由は後の說明でわかる。

大正十三年（一九二四）に下谷の吉田書店で『自然眞營道』中の人相篇三册の寫しが發見されて狩野博士の手に渡つた。翌十四年には神田東黑門町の文行堂書店主人が自然眞營道の梗概をまとめた『統道眞傳』五卷を手に入れて狩野博士の書齋へ持つて來た。昭和四年（一九二九）に『自然眞營道』の燒け殘り本十二卷が現存して

いることが分つた。これは大正七年八月に當時の帝大史料編纂掛長三上參次博士に貸與してあつたために助かつたものである。次いで前記の吉田書店から測量の本が出て來た。これは序文によると、昌益の高弟神山仙確の家に傳わつたもので、昌益の學說は數學を最も重要とする旨を述べてある。この書のフル・ネームは『泰西流量地測量測算別傳弧度術』とあるからオランダ傳來の學說であろう。そして全部で三卷あり、筆者の手もとにあつたのだが、狩野博士を通じて借用を申込まれ、轉傳しているうちに所在が分らなくなつた。

筆者は狩野博士の門に出入すること三十餘年、關東大震災で一切を燒失したので、しばらく博士邸にお世話になつた。博士と同じ寢室に起臥していたので、朝に晩に自然眞營道につきて聞くところを書きとめておいた。博覽强記の博士は細かいことまで記憶しておられた。吉野作造博士の勸めで、當時手に入る限りの資料によつて『安藤昌益と自然眞營道』と題する一書をまとめて公刊した。その當時の狩野博士のお話では、生命の糧をつくる農民がほんとうに自覺したら社會の秩序が全く顚倒するであろうとの理由で、昌益の稿本一切を門外不出として置かれたのであつた。ところで筆者の著書によつて一時に昌益の學說が公開されたのでその反響が大きかつた。またいろいろな臆說も行われたことを次に略述する。

六、昌益と推定された人物

安藤昌益は秋田の佐藤信淵の父だという說が出た。かなり穿つた說ではあつたが、專門家の研究の結果誤りであるとされた。秋田城都の住と昌益の著書に明記してあるのだから秋田に住んでいたことは確かであるが、秋田人物傳にもその名がない。そこで狩野博士はもと報知新聞社にいた中村木公氏（後の秋田新聞主筆）を介して秋田魁新聞主筆安藤和風氏に昌益の搜査方を依賴された。和風氏は博學能文の人であるが自分も安藤姓であるから特種の興味を持ち、新聞紙上でいろいろの方法で秋田縣人に呼びかけられたが何等得るところがなかつた。

安藤昌益は漢字の音韻學にも造詣の深かつたことは彼の著書によつて明かであるところから安藤昌益は僧文雄の變名であろうという說もあつたが、これも誤りであつた。また宮崎滔天氏のところに安藤昌益の重要書類が秘藏されているという噂があつたので、これは筆者が調べたが虛說であつた。ついに安藤昌益の日記が見つかつたとB氏がいいだした。この人は狩野博士も一面識ある人であつたが結局眞っ赤なうそであつた。こんな例はまだ幾つもあるがここでは省略する。人間は一つの波に乘ってでたらめを云うものの多いのには筆者も驚いた。

七、北千住の仙人

昌益關係者たちのアジトと云つた風のものが江戸北千住にあつたことが段々分つて來た。北千住に住んでいて、『自然眞營道』の大著を明治まで持ち傳えた橋本律藏の住居あたりが中心であつたらしい。律藏は寶曆時代から何代目であるか明かでないが、自家に大した革命的著書が隱されていることを他人に感ずかれることを恐れて近隣のものと交際せず、近所では仙人扱いにされていたので、「北千住の仙人」というアダ名で知られていた。ただ律藏の極めて親しかつたさかな屋（魚商）の主人內田氏にだけはその書のことを打ちあけていた。內田氏は律藏の學識と人格とを知つて經濟的援助を內々やつていたので、時々來てはくつろいで話し込んでいたという。このさかな屋の息子が內田天正堂であるが、いつとはなしに『自然眞營道』のことを父から又聞きに聞いて眼をつけていた。ところがこの仙人律藏が死んで、その藏書が賣物に出たと聞いて、そりや大變だと、買つた本屋を聞いたら淺草の淺倉屋であるというので、天正堂は直ちに淺倉屋へかけつけて『自然眞營道』を買取り、これに「極秘」、「門外不出」等の印をわざわざ彫らせて一册毎に押したのである。內田天正堂は京大にいた內田銀藏博士の緣戚で、さかな屋の學者息子、また藏書家として知られていた。一時帝大史料編纂掛に勤めていた。然しこの人には昌益の思想はよく理解できなかつたらしい。この天正堂も故人となつたので、その藏書を本郷森川町の前記田中淸造氏が買い取つて狩野博士のところへ持つてきたのである。天正堂が『統道眞傳』を買わなかつたのは、彼は『自然眞營道』の名を聞いていたが、『統道眞傳』の名を知らなかつたからである。後に仙人關係の一人からその名を聞いて狩野博士に報らせて來たころは淺倉屋書店から姿を消していたという。ところがこの稿本もまたあちこち轉傳して最後に狩野博士の書齋にめぐつて來たのも不思議な因緣である。この顚末を實際に見ていた筆者には、魂を打ちこんだ著書は生きているもののように思われた。淺倉屋で橋本律藏から買つた本は大そう多かつたというから他の珍書も草稿もまじつていたと思われるが散逸してしまつたのは惜しいものである。

八、昌益の實行運動

農民の救世主を以て自ら任じていた昌益は自然眞營道を弘める方法として自分の弟子たちを全國の要所に配置した。彼の高弟神山仙確（確仙とも仙庵ともいう）をはじめとして高橋大和守、中居伊勢守、關立竹などは靑森縣八戶にいて船舶の出入を利用して大阪方面の同志と連絡を取つた。大阪は西橫堀に志津貞中、同道修町に森映確がいた。京都三條柳ノ馬場に明石龍映、その近くの富ノ小路に有木靜香が居て活動していた。長崎には京都出身の弟子（姓名を明記していない）を配したが、この男は輸入品の吟味役（調査係）である地位を利用してオランダのカピタン（船長）、船員、學者等に接して外國の事情をさぐり、これを昌益に傳えた。昌益自身も長崎に學んだばかりでなく、「ひそかに漢土にわたり」と『統道眞傳』第五卷萬國之卷に云つているから當時の中國の事情も實地見學したのである。これは鎖國時代に於ける冒險事業の一つを敢行したことになる。次に奧州街道の須賀河に渡邊湛香がいて東西交通の要路を扼し、北海道松前には葛原堅衞がいてエゾ（蝦夷）の開拓と農民の訓練とをねらつた。これらの弟子たちはいずれも醫者で庶民と公然接觸しながらの主義宣傳は興味深い方法である。

さてこれらの弟子たちの中で八戶出身の神山仙確、高橋大和守、中居伊勢守等のことはぽつぽつ分つて來たが、全國に配置されたものについて何か證據となるものを探して見ようじやないかということになつた。そのころの東京市史編纂係につとめていた島田一郎氏が北千住の仙人關係の調査にあたり、狩野博士は秋田、須賀河、八

戸方面を歩かれ、筆者は京都、大阪、伊勢、九州方面を探ることになつた。

北千住の仙人關係の方は隨分足まめに調査されたが、かんじんな内田さかな屋の主人も息子の天正堂も故人になつてしまつたので手がかりに乏しく、律藏の妻女の行くえも分らない。種々苦心の結果は前記の聞込み説程度のものであつた。狩野博士の須賀河、秋田方面は依然手がかりなく、八戸から高橋大和守が祈禱に用いたらしい護符を持ち歸られただけであつた。筆者は京都に於て明石龍映の末孫と推定して差支ない明石厚明氏を探しあてた。この方の父君は醫者で京都病院の院長であつたばかりでなく、代々醫を業とし、何代も三條柳ノ馬場に住んでいたという。院長時代に小松宮樣に揮毫していただいたという額を掲げ、大きな玄關の兩側の棚に醫書がぎつしり詰つていた。昔の京都の大火で燒けたとのことで古文書は殘つていなかつた。當主厚明氏は醫者でなく、この方の代になつて居を八坂神社の近くに移し西陣織物組合の理事をしておられた。筆者は京都市の戸籍を丹念に探してもらつたが、明石姓のものは二家族しかなく、他の一家族は嵯峨に住み他國から新らしく移轉して來たもので、昌益とは無論緣がなかつた。次に富ノ小路にいた有木靜香につきては得るところがなく、有木という姓の人すら見つからなかつた。

ちようど『自然眞營道』三册が京都で出版されたころから百卷九十二册の大著『自然眞營道』の草稿完成ごろにかけて起つた大事件木曾川治水工事。これは木曾川と何の關係もない九州の薩摩藩に手傳い普請としてやらせた政略工事で、このために二百數十萬兩を薩摩藩に費やさせ、その重任の責めを負うて薩摩藩士約五十人が切腹、三十二人が病死した。この大事件が昌益及び弟子たちの行動に影響した證據物はないか。これも筆者に課せられた研究問題であつたが、筆者の寡聞なると古文書を見る機會が乏しいので、未だに何の效果をも擧げ得ない。これもその道のベテランに御協力をお願いしたい。

大阪の西横堀にいた志津貞中、道修町にいた森映確の跡を探つて見た。ここは昔と同じく藥種屋の多いところだが、組合本部を尋ねて見ると、一度火災でスッかり燒けてしまつたことがあるとのことで古文書は殘つていなかつた。森醫院というお醫者さんはいたが、僅か五十年ばかり前に移轉して來て開業したのだといわれた。

道修町の東濱から藥種を積出す船が、一方は長崎、一方は江戸および東奥諸國へ向けて往來した。從つて交通の便宜が多かつた。昌益の門人たちはここに陣取つて藥種賣買をしながら全國の同志たちと通信連絡を取り合つていたのであろう。

九、刊本の發見

昭和六年二月のことであるが、京都の大屋德城氏が某書庫の整理をしておられた際に、偶然にも『自然眞營道』三册の刊本を發見したと狩野博士に報らせて來た。筆者は狩野博士に代つて同年六月わざわざ京都まで實物拜見に行つた。これは云わば自然眞營道の緒論ともいうべき程度の內容で、首卷の序文に寶曆二壬申十月奥北八戸縣靜良軒確仙序とあり、本文の第一丁に、確龍堂良中述、門人靜良軒と書してある。同書の末尾に續篇の豫告はあるが、ついに出版されなかつたものらしい。この書の出版年月は寶曆三年二月で、翌四年の圖書目錄に孔子一世辨記二册安藤良中、自然眞營道三册同と並べ書してあることは前に述べた通りであるから、『孔子一世辨記』の公刊されたことは確かであるが未だに姿を現わさない。

昭和七年四月東京でも三册の刊本『自然眞營道』が發見されて狩野博士の手に入つた。これは甲州の古本屋が東京の古本市へ持つて來た書籍の中にまじつていたもので、神田五軒町の文行堂書店主人の手を經て狩野博士の所藏となつたのである。京都の大屋德城氏發見のものと全く同じ版である。これで刊本が東西に一部ずつ現われたのみならず、京都にも讀者があり、比較的交通の不便であつた甲州にも讀者があつたことだけは明かとなつた。

その後間もなく、確龍先生韻鏡律正と表紙に書かれた寫本が見つかつた。これは歷史家中道等氏が八戸小笠原家の藏書中から發見されたものであるが、「中村藏書」の印がある。小笠原家と中村家は親戚であるばかりでなく、兩家とも安藤昌益の弟子と關係がある。またこの寫本の表紙に確龍先生とあるが中味は有名な漢字音韻學の大家僧文雄の書いたものである。開卷第一に「無相沙門文雄僧谿撰」と明記してある。これを安藤昌益が弟子たちに漢字の音韻を說明するために敎科書として用いたという意味で表紙に確龍先生と昌益の弟子の一人が書いたことが判る。僧文雄は昌益と同時代の學僧であり、丹羽出身で、一代は京都附近で暮していたのに、その著書の草稿を昌益が寫して來て八戸で弟子たちに敎えたことは、昌益が如何にしばしば京阪方面へ旅行したか、また如何に研究心が强かつたかの傍證にもなる。

安藤昌益の身元と遺稿につきて

カナダ公使ノーマン博士が『忘れられた思想家（安藤昌益）』を編纂されたとき、筆者も資料の提供などでお手傳いしたが、そのころはまだ昌益の身元などは忘れられたままで見當もつかなかつた。ところがその後八戸市の鄕土史家たちによつて、大した手がかりをつかまれた。

十、宗門改帳に書かれた昌益とその家族

昌益の弟子たちが八戸にいたことはその著書によつて判つていたが、そして八戸の弟子たちの數も他より多かつたが、昌益自身がいつごろ秋田から八戸へ行つたのか、また果して八戸に居住していたことがあるのかどうか推定するすべもなかつた。ところが三年間昌益が八戸に在住した確證を發見したのは次の事情からであつた。

八戸藩の『藩廳日記』は寬文五年（一六六五）から明治四十三年（一九一〇、狩野博士による昌益發見十一年後）まで二百四十六年間約七百十册の貴重な日記史料であるが、昭和二十五年の春、南部家から民間に拂下げられたので始めて八戸鄕土史家たちが自由に研究し得る資料となつた。この鄕土史家たちのグループは長老格の小井川潤次郎氏、藩廳日記を買取られた篤志研究家上杉修氏、神官野田健次郎氏等が幹部メンバーであるが、小井川氏は八戸開藩の寬文五年から三十三年間を詳細に調べて在來の八戸藩史や鄕土史の誤りを指摘された。野田氏は藩廳日記の中途から手をつけ始めたが、偶然にも昌益が八戸に在住した時代にあたり、延享元年八月九日の日記に始めて昌益の名が發見された。

その日記の內容は、遠野南部家の射手が八戸市外館村にある櫛引

八幡宮へヤブサメ（流鏑馬）奉納に來て、射手三人が病氣になつたので御町醫安藤昌益に命じて治療させた。三人とも全快したので、藥禮として金貳百疋昌益へ賜わつた。ところが昌益は藩の仰せで遠來の射手をいたわるために治療したのであるから受取らないというので、遠野の射手たちは謝禮金のやりばに困つて御奉行へその旨屆出たという意味のことが書いてある。この外昌益の醫術が優秀であつたことを例證するに足る記事が二三ある。

次いで寶暦十一年から十三年までの御用人日記は古帳面を裏返した紙を再用してあるので何氣なしに裏をのぞいて見ると宗門改帳であつた。その中から昌益の住んでいた八戸十三日町の一部を擧げると

一門徒願榮寺同組　忠兵衞　四十四
有人〆二十一人內男十一人女十人
一門徒同寺同組　忠　平　二十七
有人〆八人內男二人女六人
一同宗同寺同組　昌　益　四十四
有人〆五人內男二人女三人
一同宗同寺同組文次郎借屋涼庵　七十七
有人〆六人內男二人女四人

とある。忠兵衞から昌益までは借屋と書いてないから各々一戸を構えていたことが判る。そして忠兵衞は中村忠兵衞で大阪屋という屋號で酒屋を營み、その子右助（宇助とも書く）は安藤昌益の弟子である。隣家の忠平も姓は中村で、忠兵衞の弟にあたり、昌益の弟子である。そしてやはり大阪屋號の酒屋兼貿易商で大そう繁昌したという。大阪屋というから祖先は大阪出身で、大阪に緣故もあつたであろう。殊に貿易商であるから大阪と取引があり、昌益が大阪へ進出する手づるともなつたらしい。安藤昌益の一家族のうち男二人とあるは昌益と昌益の長男と推定される秀伯（周伯とも書く）で、女三人は、一人は昌益の妻、二人は娘、或いは一人は娘、も一人は秀伯の妻であろうか。昌益の隣家は富坂涼庵で、これも醫者であるから朝晩昌益と親しく顏を合せていたらしい。涼庵の息子涼仙は輕米というところで醫者をしていたが、寶暦五年の八戸大飢饉の慘狀を記述した『耳目凶歲錄』という著書を後世に殘している。

十一、江戸櫻田の產少年昌益

八戸藩二代直政公は江戸幕府において將軍の御側用人を命ぜられた。御側用人は老中に次ぐ重役で元祿元年十一月十三日に西丸下馬場先大久保隱岐守揚屋敷を賜わつた。その時の旗本水野美作守勝種公の御家中、中村兵右衞門義重は直政公と面談する機會が多く、八戸藩の江戸詰旗本川勝儀左衞門甫慶（ヒロヨシ）とも頻繁に往來したようである。

あるとき川勝が子供が無くて困つている話をすると中村は私の子供を差上げましようということになり、中村の五男文右衞門（後丈右衞門と改む）を川勝へ養子にやり川勝文右衞門となつた。

この川勝文右衞門もまた江戸詰となり段々出世して百石取りが二百五十石取りになつた。そのころ同じ八戸藩出の江戸詰御側醫に戸田作庵という三百石取りの醫者があつた。これも子供がないので養子を欲しいと川勝文右衞門に相談したところ、自分の兄中村三郎右衞門の二男三之丞（江戸櫻田の產）を戸田作庵の養子に世話した。そしてこの三之丞を藩公の仰せに從い、作庵自身のもとの名昌益（正益とも書く）と呼ぶことになつた。このとき昌益は十三歲で養子緣組は享保四年二月十四日江戸に於て取結ばれたことを江戸から八戸藩へ報告して來たと藩廳日記に書かれている。この少年が後年の大思想家安藤昌益である。後に不緣になつたので昌益は秋田にいたころの安藤姓を名乘るようになつたようである。昌益の實父中村三郎右衞門は松平縫殿助御家中とあるが、松平縫殿助は『性名分類』（上杉氏藏）によれば

壹千石　西丸御徒頭
鐵炮州本湊丁　松平縫殿助忠茂

とある。ここまで判明したのは八戸鄕土史家たちの藩廳日記研究による業績であり、昌益及びその弟子たちの系圖を細かに調べあげられた野田氏の努力の成果である。

昌益は江戸で醫學を修め、長崎では醫學とオランダの事情を學んで世界萬國という思想を懷くに到つたのであろう。八戸へ行つたのはその經路と理由がまだハッキリ分らないが、昌益が一戸を構えていた八戸十三日町は昔でも繁華街の中心であつたから、いわゆる御町醫ではいきなりここで一戸を構えることは容易でない。これは中村家との姻戚關係があつたから便宜を與えられたのであろう。野田氏の調査材料を見ると昌益が戸田家と不緣になつたのは享保八年のころ戸田作庵が二度目の養子玄釣をもらつたころらしい。昌益が八戸にいた確かな證據があるのは、延享元年から同三年までの三年間で、その後八戸を去つている。寶暦十三年三月に昌益の息子でやはり御町醫であつた周伯（秀伯とも書く）が母親をつれて上京したいと藩廳に願い出て許可されている。このとき他の女二人はどうなつたのか明かでない。或いは女二人は江戸へ先發していて、あとから周伯と母（卽ち昌益の妻）が江戸で落合つたのではあるまいか。

百卷九十二册の『自然眞營道』稿本は一時に書かれたものではない。昌益が折にふれて書きとめて置いたものを弟子たちが編集したと判斷される記事が第二十五卷眞道哲論の卷に見える。八戸には神山仙確はじめ弟子たちも多かつた。しかし八戸に於ける延享二年、寬延二年、寶暦三年の凶作、寶暦五年の大凶作などが、昌益の著書に直接反映していないところを見ると八戸で編集されたものとは思えない。江戸北千住にあつたと推定されているアジトで弟子たちが編集したものらしい。昌益の手元にあつた草稿は日記の表紙であつたと北千住の仙人關係者間にいい傳えられていたから原本は大部分昌益が旅行中に書いたものの集積であろう。江戸時代には輪郭や日附を木版で印刷した半紙版の日記帳を日本橋の須原屋で賣つていたからそれを使用したようである。

安藤昌益の居宅に於ける『自然眞營道』の編纂に當つた弟子たちが淸書も製本も表紙も手製でやつたと思われる。弟子の一人が昌益に向つて「先生、何か表紙の裏張りにする紙がありませんか」という要求に答えて出された反古紙の中に八戸から引揚げるときに持つて來た書類の一束があり、その中に前記の昌益宛書簡斷片等の發見物がまじつていたのであろう。從つて『自然眞營道』の編集は昌益の居宅に於て行われたと見るべく、表紙の裏張りを反古紙で間に合わせるほどの質素な生活さえ想像される。

十二、今後の問題

以上讀者諸氏にわかりやすいような文章で書いたが、實は安藤昌益の著書は全部特種な漢文で書かれ、これを讀破するだけでも容易でない。たとえば天地を轉定と書き、相對性原理を互性活眞と書く類は枚擧にいとまなしである。從つて研究の苦心は一通りでない。その他昌益の著書探し身元探しに、狩野博士を筆頭として篤志家諸氏が苦心從事すること半世紀餘になる。

筆者の著書『安藤昌益と自然眞營道』は英と佛とに紹介され、モスコーの圖書館へ二十部まとめて送られたことは聞いたが、その他の國のことは知らない。今度ノーマン博士の編集された英文著書"Andō Shōeki and the Anatomy of Japanese Feudalism"（安藤昌益と日本封建制度の解剖）はエーシャティック・ソサイティー（亞細亞協會）の研究報告として世界的に紹介された。その和譯『忘れられた思想家（安藤昌益）』も內地で大そうな賣行であつたと聞く。昌益は自分の著書の中で百年後に必らず自分の說を認めるものが出現すると豫言しているが、その豫言が今や世界的に實現されたわけである。

ここで讀者諸氏の御參考として今後の問題を要約して見ると

（一）昌益の著書に關しては『孔子一世辨記』の出版されたことは確實であるから、どこかに一册でもかくれていないか。また北干住の仙人の所から姿を消した半紙版の昌益自筆日記は百卷九十二册の材料になるほど多くあつたのだから、たとえ一册か二册でもどこかにかくれて發見されるのを待つていはしないか。日記帳だから無論表紙に自然眞營道だの確龍堂良中だのと書いてあるはずがなく、內容を讀まなければ昌益自筆と判別できまいが、たとえ一册でもあれば昌益の行動につきて大きな手がかりとなろう。また弟子たちの書いたものもどこかに殘つているであろう。

狩野博士は昌益の日記を探し出すために、和本屋、古書展は勿論、古本市場、和本のつぶし屋、屑屋のもつて來る古證文類まで絕えず探されたが不成功に終つた。

（二）昌益の系圖と末孫に關しては水野美作守勝種公の御家中、中村兵右衞門義重（昌益の祖父）、中村三郎右衞門（昌益の實父）、またこの三郎右衞門は松平縫殿助忠茂の御家中とあるからこれらの系譜や關係古文書などに明るい方々に調べていただきたい。また昌益が一度養子に行つた戶田作庵の系譜及び古文書なども殘つていれば參考になろうと思う。

（三）昌益は秋田では藤原良中、安藤良中、または確龍堂良中と名乘つていたと思われるから、すべて新らしい眼で秋田の古文書をもう一度見直す必要があろう。

また昌益時代には漢字の使用が甚だ自由であつたから、良中を良仲と書き、昌益を正益、島守を島盛、盛岡を森岡、右助を宇助、秀伯を周伯と書くくらいのことは公文書でも平然と行われていた。のみならず昌益の年齡も宗門改帳によつてくつてみると百卷九十二册の大著完成の寶曆五年には五十三歲となり、養子說を基にして數えると四十九歲で四歲の差を生ずる。年齡の記錄も甚だルーズであつたらしいから、その邊のことも承知の上で調査を進めなければなるまい。昌益の秋田在住は八戶より先であるから江戶で養子が不緣になつてから後であることは無論であろう。

昌益の弟子の一人であつた高橋大和守の子孫に傳えられた白山緣起のことはたびたび聞き、その文句も一部は報らせてもらつたことはあるが、今度增穗殘口の書いた白山緣起跋の忠實な寫しを野田健次郎氏から見せていただいて、成るほどとうなづくところが多かつた。ちよつと變つた神道を唱え、諸國の遊里を遍歷して『艶道通鑑』及び神道に關する七部書を著述した殘口は或る期間八戶に在住したことも判り、年齡は昌益より四十歲ほど上だが、思想上昌益からかなりの影響をうけたことも分つた。このことも他日執筆して見たいと思う。昌益の信念が如何に偉大な感化力を持つていたかを知るたよりとなろう。

（四）百卷九十二册の昌益の大著がどこで編集されたかが問題となつていた。狩野博士は八戶編集說を支持しておられた。八戶の弟子が劇合に多く且つ昌益の高弟神山仙確が八戶出身であることが主なる理由であつたらしい。筆者はいろいろの點から考察して江戶編集說を主張していた。ところが今度江戶編集を確實に裏附けする資料があらわれた。大體この大著は神山仙確が編集主任となつてまとめたことはこの大著の內容から明かに判斷されるが、その仙確が寶曆四年から同七年末まで約四年間殆んど江戶に滯在していたことが、野田氏の藩廳日記研究で明かになつた。この大著の序文には寶曆五年二月とあるから、この大著の完成する前後約四年間仙確が江戶にいてその編集に努力したことが確定したわけである。

（五）次に安藤昌益の一生の最後はどうであつたろうか。今のところ未定であるが、いつの世にも、またいずれの國でも、革命的思想をいだいている者は多難である。殊に切捨御免の封建時代に神君家康を奴輩と呼ぶ者の身邊の危險は想像外であつたのではあるまいか。彼は果してどこでどうして終つたであろうか。また彼の家族たちの運命は？　是等の點は偏に後賢の研究と闡明とを俟つ。

（六）宗門改帳は古帳面を利用してあつたので、バラしたときの年代の亂れも考えられ、八戶の鄕土史家たちも年代の決定に迷い、一弟子の年令から推定したとのことである。ところが、ごく最近弘前大學の羽賀與七郎敎授から贈られた『和算家神山由助久品について—安藤昌益をめぐる人物』によれば、同氏は靑森縣史を引用して延享元年六月廿九日「八戶領內宗門改及ビ惣人數ヲ調査ス」、寬延二年十二月廿六日「八戶領內宗門改竝惣人員ノ調査ヲ行フ」とあり、大日本年表には「延享元年幕府戶口調査」とあり、また「寬延三年幕府諸國ノ人口ヲ調査ス」とあるから八戶の宗門改は寬延三年の記事だと主張しておられる。歷史的な裏附があり筆者もこれを支持したい。この年は養子說から數えて丁度昌益の四十四歲にあたり、年令差の疑問も解消する。從つて昌益は延享元年（一七四四）から寬延三年（一七五〇）まで七年間八戶に居住したことになり、大著完成の年は四十九歲が正しいことになる。（終）

（筆者は梵文原典研究所長）